

けれども彼らの悲しみは、伝わって  
 きました。  
 しずかになる。しんごは、ぬむく  
 てぬむくしてかたなくなりました。  
 だつて、カーテンの外の空気が、ひん  
 やりしてきて、いままでこんな風に遅く  
 まで起きていた事がなほ程の時間なの  
 です。  
 「ぬむいよ、僕、もうぬるね、おやす  
 み。」  
 机の上に広口びんを戻して、しんご  
 はバンドにもぐり込みました。  
 次の朝、おかあさんは、3かいもし  
 んごを起しに来ましたのに、しんごは  
 何も知りません。  
 「うーん、ぬむいよ」  
 4回目、目ざつと目を半分醒あけたし  
 んごは、いいいきました。おかあさんは  
 「窓を開けたままねてはいけません。  
 かぜをひきますよ。」  
 といつていきました。けれどもしんごは、  
 「うーん」  
 とのびをしていて、さびていませんで

した。とてもよいお天気です。  
 「わあ、まぶしい。」  
 ヤツと、やつと目があきました。  
 を洗つて、大急ぎで二はんです。  
 「おなかさん、ほくぬ、かたつむりと  
 話しちやつた。面白いわ、ちやうし  
 んきで声をきいたんだ。かんさつに  
 つきにつけよう。」  
 さつそく、しんごは昨日の夜の話し  
 です。  
 「おやおや、おもしろい夢だったわね。  
 おかあさんは、笑いました。  
 「ちがうよ。」  
 しんごは、いっしょうけんめい説明  
 します。すると、とうとう学校に行  
 く時間になつてしましました。おな  
 あさんは  
 「まあ、そうなの。そういえば、ゆう  
 べは夏までしたね。けしの夜には不  
 思議なこともあつたのよ。」  
 「げしつてなあに。」  
 と、しんごにはわかりませんので、き  
 きました。

「中はね、一年のうちで、お風呂の長  
 さが夜の長さより比べ、一番長くなる  
 日なのよ。外国では、とても盛大な  
 お祭りをするのよ。そう、うう夜は、  
 妖精とかなんかもですつて」  
 一ふうん、あ、もとひろくんが来た。  
 じや、ぼく、行つてきます」  
 しんごは大急ぎで、スリッパを放つ  
 ぽり出して、学校に行きました。  
 その日は、一日がどつても長くて、  
 早く帰つてかたつむりの話かききたら  
 など思ひなから、勉強しました。最  
 後の時間は理科で、先生が、  
 「観察日記をつけていますか」  
 と、きいたとき、大きな声で、  
 「はい」  
 と、いいました。  
 「授業が終ると、  
 一回、」  
 といつて、教室をどび出し走り出しま  
 した。  
 バタバツと家になけ込んで部屋に  
 入り、ランドセルを放り投げてから、



ちよつと考える様にたちどまるよ。しんごはそれを拾って机の上におさました。聴診器をひっぱり出し、びんにくっつけます。

「何か言つてよ。急いで帰って来たんだ。観察日記をつけなけりやならないんだ。」

しんごは耳をすましました。こそつとも音かしません。かたつむりたちは、みんなからの中にどじこもつて、からもカサカサしています。

「おかしいなあ。ぬてるんだらうか？ まあ、いいや。」

どつぶやいて、しんごは机に向い、昨夜のこをなきはじめました。

「よくわからなかつた所は、みんはなぶいてしまいましたが。」

それからまた、かたつむりに話しかけました。何でもないので。

「遊びに行つてきます。」

と、おなかあさんに言つてから、野球をしに行きました。しんごは、久しぶりに晴れたので、みんなど遅くまで、公園で野球をしました。

園で野球をしました。しんごは、フリーストです。とても忙がしく、たいてい帰つてきたとき、おなかあさんに、家に帰つてきたとき、おなかあさんに、しんごのフリーストがいかに守りがかたいか、とくに話せるのです。

夕方遅く、玄関にしんごがすべり込みました。いつものように、おなかあさんは、

「アウト。」

と、いって、しんごをベンチではなく、おふる場にとじこめました。どうも、先い落してでてくると、しんごは、どしどしきようは、しんごのすきなハンバークのようです。

「わあ、いいにおい。」

大あわてで、夕オしをつないながら、しんごは着がえてきました。

「おなかすいた。」

と、いって、しんごの前なのに、おなかあさんからむりにハンバークを、二もらつて、食べながら、しんごの今日の活やくを、一生けんめい叩いていました。

少しして、おとうさんも帰ってきて、みんなでゴハンを食べている時には、今度はまた、かたつむりのことをいいました。

「観察日記をつけたよ。きのう、かたつむりにきいたこと。」としんごは得意そうにいいました。すると、おなかあさんはびっくりしてしまつて

「しんごくん、それ、学校に持つてゆくのでしよう？」とききました。しんごは

「うん。理科の時間にぬ。」先生はきつと、かたつむりがしゃべれることを知らないわよ。」

「そうだね。きつとおとろくぬ。でも、ぼく先生に話してあげるんだ。かたつむりの先祖は、火星からきたんだから、ってぬ。」

「えっ、かせ？ 星の火星？」とおとうさんも新聞から顔をあげました。

「しんごは夢でも見たんじゃないのか。何はともあれ、その観察日記は出せないな。」とおとうさんはいいました。

しんごはよくわからないけれど、不満そうなお顔をしておなかあさんをみました。

「あのぬ、しんごくん。ふつうはかたつむりはしゃべらないものです。昨夜は夏至の夜だからきつと不思議が起つたのでしよう？ だから観察日記というのは、ふだんのしゃべらないかたつむりの生活を、かかなきゃいけないのよ。みんなより上手にかけるわぬ。」と説明するのをしんごは、じつときいていて考えました。

どうも、そうした方がよいみたいですよ。

「うん、じゃあ、そうするよ。かたつむりはお水をかけてあげる方がいいんだとか、はっぱを食べるようですよ、っていうのをかけばいいんだぬ。」

「そうよ。よくみているのぬ。」

「うん」と嬉しそうにしんごは言つて、ごうそうさまと、勢よくドアをあけて、自分の部屋にとび込みました。

机の上のびんに顔をくっつけるように、のぞき込みながら、さっき書いた観

察日記をおしやうに机の中にしまいました。

「かたつむりさん、ぼく決めた。大きくなったらぬ、潜水艦をかうんだ。そうしたら、いっしょに海の穴にいこう。そうすれば、大海かたつむりに会えるよ。世界にたった1匹きしか残っていないんだけどぬ。ドリトル先生がやったまいたいに通訳をつけて。」

「おかせんたものがかわかす、困ったわと言いながら、しんごの部屋にシーツをとりに入りました。机の上には、びんにあじさいの葉っぱが入って、枯れていました。」

「おやおや、しんごはいったい、かたつむりをどうしたのかしら」とのぞいてみると、かたつむりがいません。

その時、

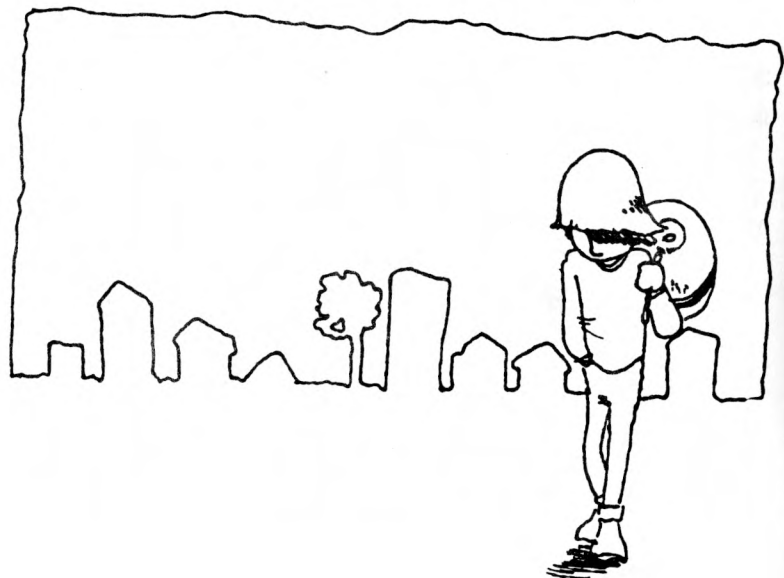
「ただいま」と元気な声が出て、びぢよびぢよのしんごがとびこんできました。

「ぬえ、しんごくん、この中のかたつ

ぶしぎが起ころんだぬえ」

「えっ、あんまり、しみじみしんごが言うもので、お母さんはついてゆけず、きよんとんとしてしまいました。しんごは大きくなった。きよんとん潜水艦で海の穴にゆくのだと決心していたのでした。」

あしあし



むり、どうしたの?」とおかせんが着替えをだしながらききますと、しんごはにっこり笑って

「にがしたんだ。ぼく、観察日記は外にいるかたつむりで、つけることにしたよ。かたつむりたちはにげないんだよ。庭のあじさいの葉っぱをさがすといるもんだよ。」と答えました。

「お母さんはそれをきいて、しんごが優しい子だよ、よかったと思いつつ、とてうれしく感じました。」

「よく宿題ができたよぬ。」というので、しんごも

「うん」といい、本棚からドリトル先生航海記をひっぱりだしてきて

「おかせん、この本、ぼくにきよめるぬ。」とききました。お母さんは

「ええ、ひらがながふってありますよのぬ。でも急にどうしたの?」この問、よんであげたはかりでしよう?」と首をかじげました。

「いいんだ。ぼく、ひとりですむ...ぬえ、げしの夜っていうのは、本当に

# くそ馬がかりのめい

いどゆいあ



さうですぬ。この話をはじめるど  
 して、良くありさうな話なわけです  
 か……  
 随分と私も若かった頃でした。私  
 の友人に、妙に気にかかる文の子が  
 一人居た事か。今、私にこの話を書  
 くようにさせているのです。その子  
 はめいという名でした。  
 ふたんは、別に目立つというわけ  
 でもないのですか。ひどく反抗的な所  
 に一度気が付いたら、もうだめな感  
 じの子だったのです。なせかとい  
 と、露骨に反対ではなく、精神的な  
 ものに対する、鋭いきつさ。と、い  
 た感じでしたから、気が付く人のみ  
 にくくような、私なんぞどうしても  
 にしてしまおう様なそんな反発した  
 めいは私に、  
 「心の中で神様を信じている私がい  
 るわけ、と、いいました。  
 これは、きつと彼女の友人達が皆、  
 神様を否定していたためではなかつ

たかど、私には思えませんでした。  
 めいは、誰も本気で信じているは  
 ずの、白い馬の騎士に憧れたり、心  
 中で、友人を勝手に創り出したりして  
 いるようでした。そして、自分の見持  
 さえも、表面にあらわす時は正反対を  
 言つてしまふあたりで、たのめです。  
 そんなめいも、ちつとも美しくなん  
 か、いけいれい、と、たまたますうに、こ  
 なり、微笑むと、と、てもあどけな  
 くなり、ました。  
 男の子達は、そんな、小なまりき  
 めいを、ひびく、身近に感じたり、世  
 話を、やきたく思つたりするよう  
 につまり、めいは、そのへそ曲がり  
 まく、生かして、けつこう物好き  
 子達に、好まれたの、でした。女の  
 子達は、彼女を、嫌ひました。本  
 当のめい、  
 加え、るため、半分は、嫉妬で、半  
 分は、  
 蔑で、した。けれど、めいは、と、  
 良心の、とか、めいも、感じ、す  
 して、いる、ように、見え、た、の、  
 です。

彼女は、誰とでも仲良くなりたさ  
 うでした。  
 そのため、男の子達、とくに真  
 実の子達は、愛された、と、考  
 えて、いる、男、  
 の、子、達は、ひびく、  
 だ、い、の、もう、二、度、と、特、  
 定、の、人、な、と、愛、さ、  
 ない、と、言、い、放、ち、友、人、  
 で、い、た、と、誰、  
 に、と、も、皆、知、り、ま、し、  
 た、と、い、う、と、  
 押し、た、よ、う、に、い、う、  
 か、中、を、の、そ、い、て、み、  
 る、と、確、か、に、め、  
 い、は、怒、れ、つ、ほ、く、一、  
 人、の、人、を、見、て、い、  
 る、と、あ、つ、と、い、う、  
 ま、い、ま、す、  
 そんな、時、の、彼女、は、  
 な、に、か、の、よ、う、に、  
 れ、し、さ、う、で、見、  
 こ、そ、本、気、に、ち、  
 しま、い、ま、す、  
 彼女の、夢、中、  
 る、人、の、話、を、  
 は、じ、め、た、ら、  
 キ、ウ、キ、ラ

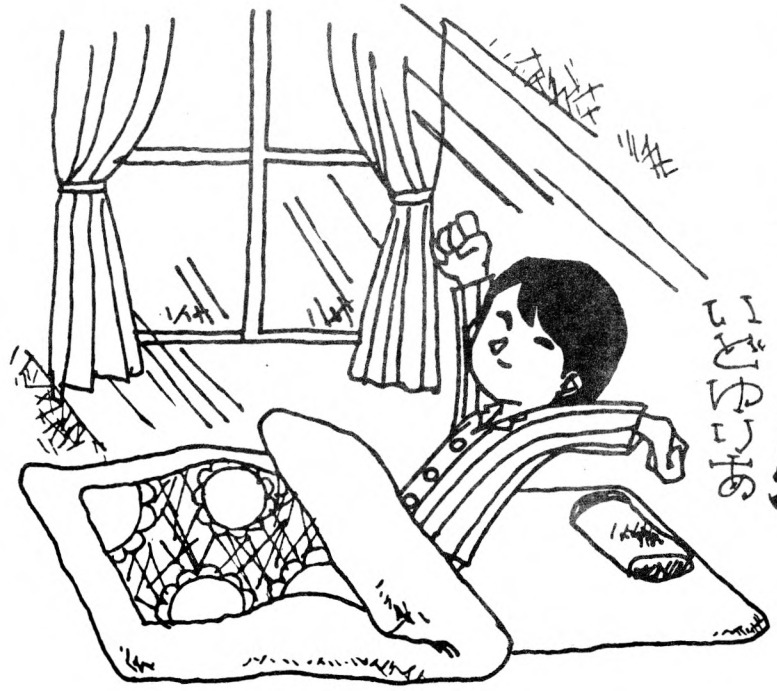




れたけがその理由でした。いろいろな  
 人が彼女に注意しました。悲しい恋し  
 かなでできないめい。そうでは  
 ないか？相手が彼女を嫌いと  
 言わなければ、決してめいはその人  
 を好きになれなかつたのですから。  
 男の子達は言いました。「確か  
 にはあいつは良いい奴だ。でもめ  
 いの二と解らんやっつて放つてけ  
 よ。僕じゃだめない。好きだよ。め  
 い。」その言葉は禁句です。ヘソ  
 まかりのめいは、フンわかつてた  
 まるもんです。嫌いやあなたと答  
 えます。そういふ噂を聞いた彼は、ま  
 すますめいを嫌いました。  
 ところが、いつたにめいのひびい  
 へソまかりは、いつたにどうして  
 たのでしよう。  
 小さい頃からそうだったと覚えて  
 るのです。もしかして、もしかして  
 ら。めいのお入さは、まん中にな  
 った。

たのじゃないかしらと私は今でも思  
 っています。めいは、たった一人の  
 女の友人である私とも、旅行先で  
 ても、決して一緒にお風呂に入ら  
 うとはしませんでした。そして、  
 彼女へのソまかりは、なおりませ  
 んでした。人が右と言ったら、サッ  
 してさうね。とは言わす左むわ  
 というのでした。或る時、ふと  
 身になつてめいは、せ、ビキニを  
 着ないの？と聞いたとき、彼女が  
 ありました。彼女はいやあな  
 顔をしてお腹を冷し、ちやよく  
 ないわと答えたので、お腹がある  
 のかしら。ヘソまかりのめい。  
 本当のところが、いつたにどう  
 だ。

# 夏の夜の秋



いどゆいあ

ゆうは、今朝もは、ちりと目を覚  
 ましました。外には、まだ白っぽ  
 い朝のやが残り、うーんと伸び  
 をひとつして、窓を開け、木のか  
 おりに、とてもちか、たにおい  
 が、ひんやりとした空気が、一  
 緒に流れ込んで来りました。そ  
 う、あ、今日もお天気が、なり  
 そうだ。と一人、呟いて、着替  
 えを、ひっぱり出しました。ブル  
 ーのシャツは何も洗たくした  
 ので、色が白っぽくなつて、下  
 におかあさん、台所で、早く  
 起き、湯気をたてているおな  
 べの前で、包丁を使う手を止  
 めて、おはよう、今朝は牛の  
 お乳、出がい、い、い、い、い、  
 ました。

「おはよう、そう、よかつたね。今、搾れるのはあの一頭だけだからと密えて、歯ぶらしを口にくわえま

す。ゆうのうちには、小さいけれど農場なので、ゆうはいろいろな事をやりま

した。そして、毎日のエヤラ動物やらと一緒の暮らしがとても好きなので、おとうさんやおかあさんと一緒に働くのを楽しみにしてはいた程なのです。

「朝ごはんを食べながら」

「今日は何をやるの？」

「おとうさんにききます。」

「そうだねえ、畑に草加ひと、し、夏休みにはゆう加いるからうんと使

つてやるか。」

「はい、はい。」

「このへんの土地は少し高い所なので、作っているものも高原野菜なん

かです。」

「きょうはねえ、りょうこちやんが手伝いに来るってさ、いつてたん

だ。」

「こちそうさま。」

「とゆうは言って、横の部屋でひく

り返って少し新聞を見ました。」

「りょうこちやんはゆうと同じ小学

校のともだちで、家は農家ではあり

ません。今は夏やすみです。そ

れで、暇な時にはときどきゆうのう

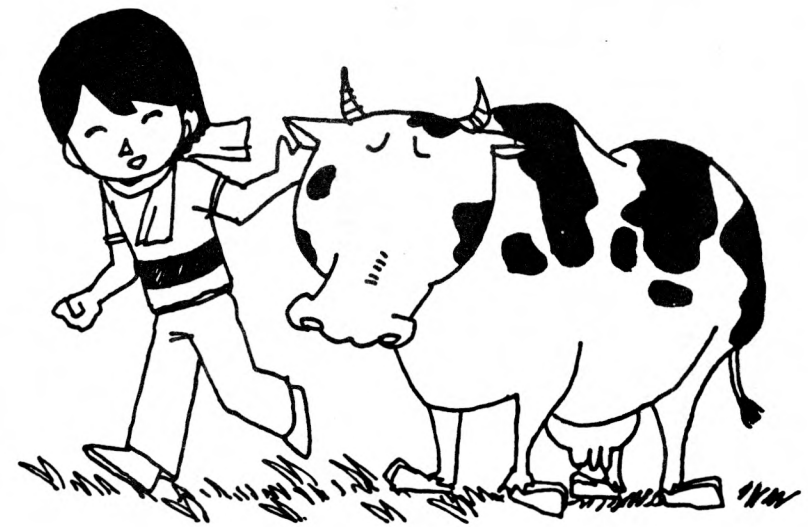
ちに手伝いに来るのを楽しみにして

いました。ゆうは、りょうこちや

んを大好きでしたから、今朝も何だ

かうれしくってしかたがなだったので

した。」



よ、ぼく、むかえにいこうかな。りょうこちやんもぼくんちが好きだ

って。」

「まよあ、珍しいのぬ女の子で、

とおかあさんが、おかわりのごはん

をつきなごらいにしました。」

「そんなことはないと思うよ、他の

子達だって知らないだけなんだ。」

「豚の仔なんか、可愛らしいもの。あ、

おとうさん、僕、仔ぶたやるから、

ね、いいでしょ。」

「おとうさんにききますと、おと

うさんは、

「仔ぶただけじゃなく、大きい方もた

のもうかな、えさはいつも所に配

合してあるからね。ちやんと気を

つけるんだよ。大きい方は特にね、

りょうこちやんはあとでくるんだろ

う、先にやっ、てしまいなさい。」

「はい、はい。」

「おとうさんは牛に

先にえさをあげます。」

「それから、一日の仕事がはじまる

のでした。」





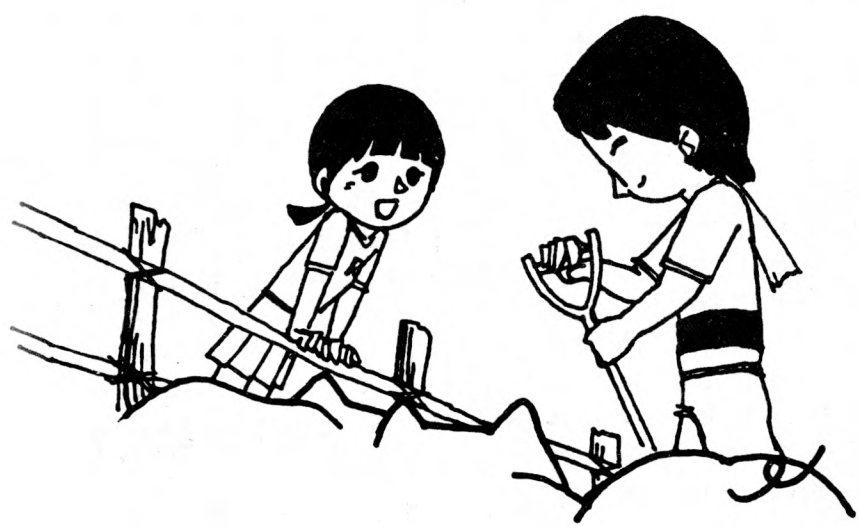
きます。  
 ぶたがえさ場に居るうち、外はまだ  
 ます。親ぶたは大きくて危険な  
 であ先には、きれいな好きでえさ場は  
 ぶたをしないのです。三匹の親ぶ  
 たを終えて、仔豚の方にまわります。  
 子ぶたは、また背のたかさもゆうの  
 腰くらいしかありません。水のみ  
 場の水を出してやり、ぼろ出しをは  
 じめました。すると、えさを食べ  
 終えたぶたから外に出てきて水をの  
 みます。  
 「あ、だめだよ、僕のセーターは  
 えさじゃないぞ……ワアツ」  
 仔ぶたはゆうを物めずらしげに、  
 つつしまわしにきました。  
 「まったく、毎朝のことなのに次の  
 日にはもう忘れちゃうのかい？僕  
 のこと。ほら、ほら、そこのすみ  
 きたないぞ、とけよ。」

ありました。  
 「よいいしよ、おはよう、ごはんだ  
 よ……ほら、ほら……」  
 ぶたたちはもうえさ場の方に出て  
 います。2つのバケツを両側にさ  
 げて入ってゆきます。アタ小屋の  
 中は清潔で、人が思う程臭いもあり  
 ません。グオ、グオ、グオ、グオ  
 グオツというなき声やらがアンがア  
 ンと鉄のさくを前足でたたいてさい  
 そくする音やら、チャボのバタバタ  
 とびまわる音がかべの中で反響しま  
 す。ゆうは、  
 「ほら、ちゃんとしてなきや頭か  
 らぶっかけるぞ。」  
 といいながら、次々にえさはこにえ  
 さを配ってゆきます。キイ、キイ、  
 グア、と左の方で鳴いているのは、  
 ワヒキいる仔ぶたたちです。  
 「まっ、まっ、まっ、そんな一べんに  
 できやしないよ。今、おまえたち  
 のぶんとってくるからさあ、まっ、まっ、  
 ろよ。」

と言って、大急ぎでとりに走ります。  
 「あっ、お水忘れた、ごめん。」  
 と、入り口の親ぶたをみて気づき、  
 ポリポリ口にホースをつっこんでい  
 っぱいに蛇口をひねります。仔ぶ  
 たはアひきが同じ所に居ますから  
 皆に同じくらいえさを食べさせねば  
 なりません。それはなかなかむず  
 かしいことです。強い奴は一人  
 で他の者の分までたべてしまうから  
 です。ゆうは、  
 「ほら、こっちは。」  
 と言って、えさはこの左はじに先に  
 入れ、グア、グア、グアと言って集つ  
 た所で右はじにはしって入って入  
 ます。それからはしって入って入  
 奴はフゴツ、フゴツと行って、弱  
 ぶたをおいはらってしまふからで  
 水が一杯になつて、のをみて、バ  
 ケツをおいて走ります。  
 「あ、忙加しい、ほら水だよ、食  
 べ終えた奴にはあげようね。」  
 と言って、順々にえさ場についてゆ



「クキイ、ヒー」とないて、ア匹が入りみだれていいます。そんな時間がゆうにとつては一番楽しい時でした。「ゆうくん、終っちゃった？」「女の子の声がしました。」「リようニちゃんだ。」「そう思っただけでゆうは、とびあがる程うれしくって。」「こっちにいるよ。仔ぶたのどこだ。外、まわっておいでよ。」「と大声で、リようニちゃんを呼びました。リようニちゃんは、はっはっはっ息をきらして走ってきて。」「おはよう、早いね。」「うん、ええの時間が決ってるんだよ。」「ゆうはちよつととくいそうに答えませす。」「一緒にやれると思って来たんだけど、お家の方行ったら、もうぶた小



屋終るかもしれないよ。ておばぢやんに言われちゃったわ。大急ぎできたのよ。」「それだけ言うともいしよつと柵をくぐって、彼女も入ってきました。」「スコップ貸して、こっちの方。もつとちゃんとうりなけりやあ。」「と、ゆうの手からスコップをとりあげると、「ほらほら、君たち、そっちにいてよぬ。」「と言いなから、少し残っていったふんをきれいに片付けてにっこり笑ってゆうを見ました。」「さあてと、次は何をやるの？」「あ、水を止めなから答えて。」「あ、点検を忘れた、ええと、ちやほほはいるな、大きいぶたも元氣と、仔ぶたも具合の悪そう、奴はいいないね、えさも残してない、よし。」「と、いっつもおとうさんの言うように言つて、一輪車につんだふんを置きに

ゆきませす。リようニちゃんはすっかり手順になれていて、その間にスコップを洗ってしましました。」「ぶらぶらと家の方に戻りながら、「ねえ、ゆうくん、ちやぼつてどうしてぶた小屋にいるの？」「え、ああ、あれはね、うじを食うんだ。そうすれば蠅が減るだろう。うちのぶた小屋に蠅がうんと少ないのは、そのせいなんだ。」「さう答えてゆうはとくいげです。」「ふうん、合理的ってわけね。」「生意気な口ぶり、リようニちゃんには納得したりしていません。」「あ、牛、外に出してやるの。」「言うかはやいか、土手の所に草を食べさせるため朝つないだ牛の所にとんでゆきました。」「ほら、みて、私のあげる草、ニンなに食べるわ、ほら、おいで、ニつちよ、おいし。」「牛のそばで、リようニちゃんはおいし。」「と、草を食べる



「はねていきました。むじやきなものだ  
 なあ。」  
 「とゆうは思いました。  
 「すると、そのとき、  
 「穴ぼこあいてるー。」  
 「とどうせ、もぐらかうさぎの穴だろ  
 う。」  
 「って大きい声で言っ、それでも走  
 っで行つてみますと、なる程直径が  
 60センチ程の穴が土手の斜面にぼ  
 かりと口を開けていました。」  
 「なんの穴かしら。」  
 「なんかなー、うさぎにしちやあで  
 かいてないし、この辺にきつねがいるとは  
 聞いいてないしなあ。」  
 「深い頭をつつ、こんでりやうにちや  
 と穴に頭をつつ、中の方でウワァンウワ  
 ァンという声かひびきます。」  
 「ねえ、何か中にいるのかしら、今

「白っぽいものが動いた気がしたんだ  
 けど。」  
 「えっ、まさか、二んな深さうなの  
 に？ 見えないよ、いたとして、もね。」  
 「ほらほら、チラチラしてる。」  
 「かしら？」  
 「よおし、行つてみよう。」  
 「とゆうは胸をはつていいました。」  
 「だつて、りやうにちやんの前ですか  
 ら。」  
 「仕事があるからね、何かあるのか  
 見たらすぐ帰つてこなけりや。」  
 「まだ畑の仕事があるのですから、  
 遊んではいられないのに気付いて、  
 しつかりとつけたしていいます。」  
 「そ  
 んなゆうを、りやうにちやんはにっ  
 こり笑つて見返し、  
 「うん、いい。」  
 「といいました。」  
 「よし、じゃあ、あぶない事がある  
 とこまるから、僕がさきだよ。」  
 「そ  
 ういつて、ゆうは土手をおりはじ  
 め、ひよいと穴の中に入りました。」

「わあああ、まああくうだああ。」  
 「ゆううくうん、だあ、いりじよあ。」  
 「ぶう。」  
 「りやうにちやんが続きます。」  
 「ほら。」  
 「と、手を差し出します。」  
 「よう、ちやんは手さぐりで、その手  
 をしつかり握りました。」  
 「あ、またみえた、あの白いもの。」  
 「こんとは耳元で、たので、余り  
 ひびきません。」  
 「よし、行くよ、足元に気をつけて。」  
 「少し、こわいなと思いながらうも、  
 しつかりつかまってるりやうにち  
 やんの手を感じて、つるつるときれ  
 いに磨かれた床の様な穴の中を、先  
 へ先へと進みます。」  
 「何か、音がひびくような気がして、  
 はつと二人が立止まったときでした。」  
 「天井から、ひよこつと首がでます。」  
 「小サくりやうにちやんがさげびま  
 した、ゆうは、きつ、と上を見る